

嵐

島崎藤村

青空文庫

子供らは古い時計のかかった茶の間に集まって、そこにある柱のそばへ各自の背丈せたいを比べに行つた。次郎の背せいの高くなつたのにも驚く。家じゆうで、いちばん高い、あの子の頭はもう一寸四分ぶぐらいで鴨居かめいにまで届きそうに見える。毎年の暮れに、郷里のほうから年取りに上京して、その時だけ私たちと一緒になる太郎よりも、次郎のほうが背はずつと高くなつた。

茶の間の柱のそばは狭い廊下づたいに、玄関や台所への通い口になつていて、そこへ身長を計りに行くものは一人ひとりずつその柱を背にして立たせられた。そんなに背延びしてはズルイと言ひ出すものがありもつと頭を平らにしてなどと言うものがあつて、家じ

ゆうのものがみんなで大騒ぎしながら、だれが何分延びたという
しるしを鉛筆で柱の上に記しつけて置いた。だれの戯れから始ま
ったともなく、もう幾つとなく細い線が引かれて、その一つ一つ
には頭文字かしらもじだけをローマ字であらわして置くような、そんな
たずらもしてある。

「だれだい、この線は。」

と聞いてみると、末子すえこのがあり、下女げじよのお徳とくのがある。いつぞ
や遠く満州の果てから家をあげて帰国した親戚しんせきの女の子の背丈せたけ
までもそこに残っている。私の娘も大きくなつた。末子の背は太
郎と二寸ほどしか違わない。その末子すえこがもはや九文もんの足袋たびをは
いた。

四人ある私の子供の中で、身長の發育にかけては三郎がいちばんおくれた。ひところの三郎は妹の末子よりも低かった。日ごろ、次郎びいきの下女は、何かにつけて「次郎ちゃん、次郎ちゃん」で、そんな背の低いことでも三郎をからかうと、そのたびに三郎はくやしがつて、

「悲觀しちまうなあ——背はもうあきらめた。」

と、よく嘆息した。その三郎がめきめきと延びて来た時は、いつのまにか妹を追い越してしまつたばかりでなく、兄の太郎よりも高くなつた。三郎はうれしさのあまり、手を振つて茶の間の柱のそばを歩き回つたくらいだ。そういう私と同じ場所に行つて立つて見ると、ほとんど太郎と同じほどの高さだ。私は春先の筍のたけのこ

ような勢いはずんずん成長して来た次郎や、三郎や、それから末子をよく見て、時にはこれが自分の子供かと心に驚くことさえもある。

私たち親子のものは、遠からず今の住居を見捨てようとしていた時であつた。こんなにみんな大きくなつて、めいめい一部屋ずつを要求するほど一人前いちにんまえに近い心持ちを抱くいだようになってみると、何かにつけて今の住居すまいは狭せま苦くるしかった。私は二階の二部屋を次郎と三郎にあてがい（この兄きょうだい弟ふたりは二人ともある洋画研究所の研究生であつたから、）末子は階下にある茶の間の片すみで我慢させ、自分わきは玄関側の四畳半にこもつて、そこを書斎とも応接間とも寝部屋ねべやともしてきた。今一部屋もあつたらと、私たちは

言い暮らしてきた。それに、二階は明るいようでも西日が強く照りつけて、夏などは耐えがたい。南と北とを小高い石垣いしがきにふさがれた位置にある今の住居すまいでは湿気すまいの多い窪地くぼちにでも住んでいるようで、雨でも来る日には茶の間しょうじの障子しょうじはことに暗かった。

「この家には飽きちやった。」

と言い出すのは三郎だ。

「とうさん、僕と三ちゃんさんと二人で行ってさがして来るよ。いい家があったら、とうさんは見においで。」

次郎は次郎でこんなふうひとりに引き受け顔に言つて、画作の暇さえあれば一人ひひとりでも借家をさがしに出かけた。

今さらのように、私は住み慣れた家の周囲を見回した。ここは

いちばん近いポストへちよつとはがきを入れに行くにも二町はあ
る。煙草屋たばこやへ二町、湯屋へ三町、行きつけの床屋とこやへも五六町はあ
つて、どこへ用達ようたしに出かけるにも坂を上のぼつたり下くだつたりしなけ
ればならない。慣れてみれば、よくそれでも不便とも思わずに暮
らして来たようなものだ。離れて行こうとするに惜しいほどの周
囲でもなかつた。

実に些細ささいなことから、私は今の家を住み憂うく思うようになった
のであるが、その底には、何かしら自分でも動かずにいられない
心の要求に迫られていた。七年住んでみればたくさんだ。そんな
気持ちから、とかく心も落ちつかなかつた。

ある日も私は次郎と連れだつて、麻布あざぶ 筈こうがいちよう 町たかぎちよう から高樹町
あたりをさんざんさがし回つたあげく、住み心地すこしちのよさそうな借
家も見当たらずじまいに、むなしく植木坂うえきざかのほうへ帰つて行つ
た。いつでもあの坂の上に近いところへ出ると、そこに自分らの
家路が見えて来る。だれかしら見知つた顔にもあう。暮れから道
路工事の始まつていた電車通りも石やアスファルトにすつかり敷
きかえられて、椽とちの並み木のすがたもなんとなく見直す時だ。私
は次郎と二人ふたりでその新しい歩道を踏んで、鮎屋すしやの店の前あたりか
らある病院のトタン堀べいに添うて歩いて行つた。植木坂は勾配こうばいの
急な、狭い坂だ。その坂の降り口に見える古い病院の窓、そこに
ある煉瓦堀れんがべい、そこにある蔦つたの蔓つる、すべて身にしみるように思わ

れてきた。

下女のお徳は家のほうに私たちを待つていた。私たちが坂の下
の石段を降りるのを足音できき知るほど、もはや三年近くもお徳
は私の家に奉公していた。主婦というもののない私の家では、子
供らの着物の世話まで下女に任せてある。このお徳は台所のほう
から肥ふとった笑えが顔がおを見せて、半分子供らの友だちのような、慣れ慣
れしい口をきいた。

「次郎ちゃん、いい家があつて？」

「だめ。」

次郎はがっかりしたように答えて、玄関の壁の上へ鳥打とりうちぼう帽ぼうを
かけた。私も冬の外がい套とうを脱いで置いて、借家さがしにくたぶれ

た目を自分の部屋へやの障子の外に移した。わずかばかりの庭も霜枯れて見えるほど、まだ春も浅かった。

私が早く自分の配偶者つれあいを失い、六歳を頭かしらに四人の幼いものをひかえるようになった時から、すでにこんな生活は始まったのである。私はいろいろな手に子供らを託してみ、いろいろな場所にも置いてみたが、結局父としての自分が進んでめんどうをみるよりほかに、母親のない子供らをどうすることもできないのを見いだした。不自由な男の手一つでも、どうにかわが子の養えないことはあるまい、その決心にいたったのは私が遠い外国の旅から自分の子供のそばに帰って来た時であった。そのころの太郎はようやく小学の課程を終わりにかけるほどで、次郎はまだ腕わんぱくざか白盛り

の少年であつた。私は愛宕下あたごしたのある宿屋にいた。二部屋ふたへやあるその宿屋の離れ座敷を借り切つて、太郎と次郎の二人ふたりだけをそこから学校へ通わせた。食事のたびには宿の女中がチャブ台などを提さげながら、母屋おもやの台所のほうから長い廊下づたいに、私たちの部屋までしたくをしに来てくれた。そこは地方から上京するなじみの客をおもに相手としてしているような家で、入れかわり立ちかわり滞在する客も多い中に、子供を連れながら宿屋すまいする私のようなものもめずらしいと言われた。

外国の旅の経験から、私も簡単な下宿生活に慣れて来た。それを私は愛宕下あたごしたの宿屋に応用したのだ。自分の身のまわりのことはなるべく人手を借りずに。そればかりでなく、子供にあてがう

菓子も自分で町へ買いに出だし、子供の着物も自分でたた畳んだ。

この私たちには、いつのまにか、いろいろな隠し言葉もできた。

「あゝ、また太郎さんが泣いちやつた。」

私はよくそれを言った。少年の時分にはありがちなことながら、とかく兄のほうは「泣き」やすかつたから、夜中に一度ずつは自分で目をさまして、そこに眠っている太郎を呼び起こした。子供の「泣いたもの」の始末にも人知れず心を苦しめた。そんなことで顔をあか紅めさせるでもあるまいと思つたから。

次第に、私は子供の世界に親しむようになった。よく見ればそこにも流行というものがあつて、石蹴りいしけ、めんこ、剣玉けんだま、べい独楽ごまというふうに、あるものはやりあるものはすたれ、子供の

喜ぶおもちやの類までが時につれて移り変わりつつある。私はまた、二人ふたりの子供の性質の相違をも考えるようになった。正直で、根気こんきよくて、目をパチクリさせるような癖のあるところまで、なんとなく太郎は義理ある祖父おじいさんに似てきた。それに比べると次郎は、私の甥おいを思い出させるような人なつこいとところと氣象の鋭さとがあつた。この弟のほうの子供は、宿屋の亭主ていしゅでもだれでもやりこめるほどの理屈屋だつた。

盆が来て、みそ萩はぎや酸漿ほおづきで精靈しょうりょう棚だなを飾るころには、私は子供らの母親の位牌いはいを旅の鞆かぼんの中から取り出した。宿屋ずまいする私たちも門かど口ぐちに出て、宿の人たちと一緒に麻幹おがらを焚たいた。私たちは順に迎え火の消えた跡をまたいだ。すると、次郎はみん

なの見ている前で、

「どれ三ちゃんや末ちゃんの分をもまたいで——」

と言つて、二度も三度も焼け残つた麻幹おがらの上を飛んだ。

「ああいうところは、どうしても次郎ちやんだ。」

と、宿屋の亭主ていしゅは快活に笑つた。

ややもすれば兄をしのごとくするこの弟の子供を制おさえて、何を

言われても黙つて順したがつているような太郎の性質を延ばして行くと

いうことに、絶えず私は心を労しつづけた。その心づかいは、子

供から目を離させなかつた。町の空で、子供の泣き声やけんかす

る声でも聞きつけると、私はすぐに座をたつた。離れ座敷の廊下

に出てみた。それが自分の子供の声でないことを知るまでは安心

しなかつた。

私のところへは来客も多かつた。ある酒好きな友だちが、この私を見に来たあとで、「久しぶりでどこかへ誘おうと思つたが、ああして子供をひかえているところを見ると、どうしてもそれが言い出せなかつた、」と、人に語つたという。その話を私は他の友だちの口から聞いた。でも、私も、引つ込んでばかりはいられなかつた。世間に出て友だち仲間に交わりたいような夕方でも来ると、私は太郎と次郎の二人を引き連れて、いつでもこしぎんちやく腰巾着こしぎんちやくづきで出かけた。

そのうちに、私は末子をもその宿屋に迎えるようになった。私は額ひたいに汗する思いで、末子を迎えた。

「二人育てるも、三人育てるも、世話する身には同じことだ。」
と、私も考え直した。長いこと親戚しんせきのほうに預けてあつた娘が学齡に達するほど成人して、また親のふところに歸つて来たということは、私に取つての新しいよろこびでもあつた。そのころの末子はまだ人に髪を結つてもらつて、お手玉や千代紙に余念もないほどの小娘であつた。宿屋の庭のままごとに、松葉さかなを魚の形につなぐことなどは、ことにその幼い心を楽しませた。兄たちの学校も近かつたから、海老茶色えびちやいろの小娘らしい袴はかまに学校用の鞆かばんで、末子をもその宿屋から通させた。にわかにな夕立でも来そうな空の日には、私は娘の雨傘あまがさを小わきにかかえて、それを学校まで届けに行くことを忘れなかつた。

私たち親子のものは、足掛け二年ばかりの宿屋すまいのあとで、そこを引き揚げることにした。愛宕下から今の住居のあるところまでは、歩いててもそう遠くない。電車の線路に添うて長い榎坂ざかを越せば、やがて植木坂の上に出られる。私たちは宿屋の離れ座敷にあつた古い本箱や机や筆筒たんすなどを荷車に載せ、相前後して今の住居すまいに引き移つて来たのである。

今の住所へは私も多くの望みをかけて移つて来た。婆ばあやを一人ひとり雇い入れることにしたのもその時だ。太郎はすでに中学の制服を着る年ごろであつたから、すこし遠くても電車で私の母校のほうへ通わせ、次郎と末子ふたりの二人を愛宕下の学校まで毎日歩いて通わ

せた。そのころの私は二階の部屋へやに陣取つて、階下を子供らと婆やにあてがつた。

しばらくするうちに、私は二階の障子のそばで自分の机の前にすわりながらでも、階下に起こるいろいろな物音や、話し声や、客のおとずれや、子供らの笑う声までを手に取るように知るようになった。それもそのはずだ。餌えきを拾う雄おんどり鶏の役目と、羽は翅ねをひろげて雛ひなを隠す母ははどり鶏の役目とを兼ねなければならなかつたやうな私であつたから。

どうかすると、末子のすすり泣く声が階下から伝わつて来る。それを聞きつけるたびに、私はしかけた仕事を捨てて、梯子はしご段だんを駆け降りるように二階から降りて行つた。

私はすぐ茶の間の光景を読んだ。いきなり箆笥たんすの前へ行つて、次郎と末子の間にはいった。太郎は、と見ると、そこに争つてゐる弟や妹をなだめようでもなく、ただ途方に暮れている。婆やまでそこいらにまごまごしている。

私は何も知らなかつた。末子が何をしたのか、どうして次郎がそんなにまで平素のきげんをそこねているのか、さっぱりわからなかつた。ただただ私は、まだ兄たち二人とのなじみも薄く、ころぼそく、とかく里さとごころ心を起こしやすくしている新参者しんざんものの末子がそこに泣いているのを見た。

次郎は妹のほうを鋭く見た。そして言った。

「女のくせに、いばつていやがらあ。」

この次郎の怒気を帯びた調子が、はげしく私の胸を打った。

兄とは言つても、そのころの次郎はようやく十三歳ぐらいの子供だった。日ごろ感じやすく、涙もろく、それだけ激しやすい次郎は、私の陰に隠れて泣いている妹を見ると、さもいまいましうに、

「とうさんが来たと思つて、いい気になつて泣くない。」

「けんかはよせ。末ちやんを打つなら、さあとうさんを打て。」

と、私は筆筒たんすの前に立つて、ややもすれば妹をめぐけて打ちかかろうとする次郎をさえぎつた。私は身をもつて末子をかばうようにした。

「とうさんが見ていないとすぐこれだ。」と、また私は次郎に言

った。「どうしてそうわからないんだろなあ。末ちゃんはお前たちとは違うじゃないか。他よそからとうさんの家へ帰って来た人じゃないか。」

「末ちゃんのおかげで、僕がとうさんにしかられる。」

その時、次郎は子供らしい大声を揚げて泣き出してしまった。

私は家の内を見回した。ちようど町では米騒動以来の不思議な沈黙がしばらくあたりを支配したあとであった。市内電車従業員ひぎやうの罷業ひぎやうのうわさも伝わって来るころだ。植木坂の上を通る電車もまねだった。たまに通る電車は町の空に悲壮な音を立てて、窪くぼい谷の下にあるような私の家の四畳半の窓まで物すごく響けて来ていた。

「家の内も、外も、嵐だ。」

と、私は自分に言った。

私が二階の部屋へやを太郎や次郎にあてがい、自分は階下へ降りて来て、玄関側わきの四畳半にすわるようになったのも、その時からであつた。そのうちに、私は三郎をも今の住居すまいのほうに迎えるようになった。私はひとりで手をもみながら、三郎をも迎えた。

「三人育てるも、四人育てるも、世話する身には同じことだ。」と、末子を迎えた時と同じようなことを言った。それからのは、茶の間にいる末子のよく見えるようなところで、二階の梯はしご子段だんをのぼったり降りたりする太郎や次郎や三郎の足音もよく聞こえるようなところで、ずっとすわり続けてしまった。

こんな世話も子供だからできた。私は足掛け五年近くも奉公していた婆やにも、それから今のお徳にも、串じょうだん談半分によくそう言つて聞かせた。もしこれが年寄りの世話であつたら、いつまでも一つ事を気に掛けるような年老いた人たちをどうしてこんなに養えるものではないと。

私たちがしきりにさがした借家も容易に見当たらなかつた。好ましい住居すまいもすくないものだった。三月の節句も近づいたところに、また私は次郎を連れて一軒別の借家を見に行つて来た。そこは次郎と三郎とでくわしい見取り図まで取つて来た家で、二人ふたりともひどく気に入つたと言つていた。青山あおやま五丁目まで電車で、それか

ら数町ばかり歩いて行つたところを左へ折れ曲がつたような位置にあつた。部屋の数が九つもあつて、七十五円なら貸す。それでも家賃が高過ぎると思うなら、今少しは引いてもいいと言われるほど長く空屋になつていた古い家で、造作もよく、古風な中二階などことにおもしろくできていたが、部屋が多過ぎていまだに借り手がないとのこと。よつぽど私も心が動いて帰つて来たが、一晩寝て考えた上に、自分の住居には過ぎたものとあきらめた。

適当な借家の見当たり次第に移つて行こうとしていた私の家では、障子も破れたまま、かまわずに置いてあつた。それが氣になるほど目について来た。せめて私は毎日ながめ暮らす身のまわりだけでも繕いたいと思つて、障子の切り張りなどをしていると、

そこへ次郎が来て立った。

「とうさん、障子なんか張るのかい。」

次郎はしばらくそこに立って、私のすることを見ていた。

「引越して行く家の障子なんか、どうでもいいのに。」

「だって、七年も雨あめつゆ露をしのいで来た屋根の下じゃないか。」

と私は言ってみせた。

すす煤けた障子の膏薬こうやく張りを続けながら、私はさらに言葉をつづ

けて、

「ホラ、この前に見て来た家サ。あそこはまるで主人公本位にできた家だね。主人公さえよければ、ほかのものなぞはどうでもいいという家だ。ただ、主人公の部屋へやだけが立派だ。ああいう家を

借りて住む人もあるかなあ。そこへ行くと、二度目に見て来た借家のほうがどのくらいいいかしれないよ。いかに言っても、とうさんの家には大き過ぎるね。」

「僕も最初見つけた時に、大き過ぎるとは思ったが——」

この次郎は私の話を聞いているのかと思ったら、何かもじもじしていたあとで、私の前に手をひろげて見せた。

「とうさん、月給は？」

この「月給」が私を笑わせた。毎月、私は三人の子供に「月給」を払うことにしていた。月の初めと半ばとの二度に分けて、半月に一円ずつの小遣づかいを渡すのを私の家ではそう呼んでいた。

「今月はまだ出さなかったかねえ。」

「とうさん、きようは二日ふつかだよ。三月の二日だよ。」

それを聞いて、私は黒いメリンスを巻きつけた兵児帯へこおびの間から蝦蟇がまぐち口を取り出した。その中であつた金を次郎に分け、ちようどそこへ屋外そとからテニスの運動具をさげて帰つて来た三郎にも分けた。

「へえ、末ちゃんにも月給。」

と、私は言つて、茶の間の廊下の外で古い風琴オルガンを静かに鳴らしている娘のところへも分けに行つた。その時、銀貨二つを風琴オルガの上に載せた戻りもとがけに、私は次郎や三郎のほうを見て、半分串談じようだんの調子で、

「天麩羅てんぷらの立食たちぐいなんか、ごめんだぜ。」

「とうさん、そんな立食なんかするものか。そこは心得ているから安心しておいでよ。」と次郎は言った。

楽しい桃の節句の季節は来る、月給にはありつく、やがて新しい住居すまいでの新しい生活も始められる、その一日は子供らの心を浮き立たせた。末子も大きくなつて、もう雛ひないじりでもあるまいと、いとところから、茶の間の床には古い小さな雛ひなと五人囃子ばやしなぞをしるしばかりに飾つてあつた。それも子供らの母親がまだ達者たっしやな時代からの形見かたみとして残つたものばかりだった。私が自分の部屋もどに戻つて障子の切り張りを済ますころには、茶の間のほうで子供らのさかなな笑い声が起こつた。お徳のにぎやかな笑い声もその中にまじつて聞こえた。

見ると、次郎は雛壇ひなだんの前あたりで、大騒ぎを始めた。暮れの築地小劇場で「子供の日」のあつたおりに、たしか「そら豆の煮えるまで」に出て来る役者から見て来たらしい身ぶり、手まねが始まった。次郎はしきりに調子に乗って、手を左右に振りながら茶の間を踊って歩いた。

「オイ、とうさんが見てるよ。」
と言つて、三郎はそこへ笑いころげた。

私たちの心はすでに半分今の住居すまいを去っていた。

私は茶の間に集まる子供らから離れて、ひとりで自分の部屋へやを歩いてみた。わずかばかりの庭を前にした南向きの障子からは、

家じゆうでいちばん静かな光線がさして来ている。東は窓だ。二枚のガラス戸越しに、隣の大屋おおやさんの高い塀へいと檜かしの樹きとがこちらを見おろすように立っている。その窓の下には、地下室にでもいるような静かさがある。

ちようど三年ばかり前に、五十日あまりも私の寢床が敷きづめに敷いてあつたのも、この四畳半の窓の下だ。思いがけない病が五十の坂を越したころの身に起こつて来た。私はどつと床についた。その時の私は再び起たつこともできまいかと人に心配されたほどで、茶の間に集まる子供らまで一時沈まり返ってしまった。

どうかすると、子供らのすることは、病んでいる私をいらいらさせた。

「とうさんをおこらせることが、とうさんのからだにはいちばん悪いんだぜ。それくらいのお前たちにわからないのか。」

それを私が寝ながら言ってみせると、次郎や三郎は頭をかいて、すごすごと障子のかげのほうへ隠れて行ったこともある。

それからの私はこの部屋に臥ねたり起きたりして暮らした。めずらしく気分のよい日が来たあとには、また疲れやすく、眩めまい暈ごころち心地のするような日が続いた。毎朝の気分がその日その日の健康を予報する晴雨計だった。私の健康も確実に回復するほうに向かつて行ったが、いかに言ってもそれが遅緩で、もどかしい思いをさせた。どれほどの用心深さで私はおりおりの暗あん礁しょうを乗り越えようと努めて来たかしのれない。この病弱な私が、ともかくも住居すまいを

移そうと思ひ立つまでにこぎつけた。私は何かこう目に見えないものが群がり起こつて来るような心持ちで、本棚ほんだながわりに自分の蔵書のしまつてある四畳半の押入れをもあけて見た。いよいよこの家を去ろうと心をきめてからは、押入れの中なぞも、まるで物置きのようになつていた。世界を家とする巡礼者のような心であちこちと提さげ回つた古い鞆かばん——その外国の旅の形見が、まだそこに残つていた。

「子供でも大きくなつたら。」

私はそればかりを願つて来たようなものだ。あの愛宕下あたごしたの宿屋のほうで、太郎と次郎の二人ふたりだけをそばに置いたころは、まだそれでも自由がきいた。腰巾着こしぎんちやくづきでもなんでも自分の行き

たいところへ出かけられた。末子を引き取り、三郎を引き取りするうちに、目には見えなくても降り積もる雪のような重いものが、次第に深くこの私を埋^{うず}めた。

しかし私はひとりで子供を養つてみているうちに、だんだん小さなものの方へ心をひかれるようになって行つた。年若い時分には私も子供なぞはどうでもいいと考えた。かえつて手足まといだぐらいに考えたこともあつた。知る人もすくない遠い異郷の旅なぞをしてみ、帰国後は子供のそばに暮らしてみ、次第に子供の世界に親しむようになってみると、以前に足手まといのように思つたその自分の考え方を改めるようになった。世はさびしく、時は

難しい。明日は、明日はと待ち暮らしてみても、いつまで待ってもそんな明日がやって来そうもない、眼前に見る事柄から起こつて来る多くの失望と幻滅の感じとは、いつでも私の心を子供に向けさせた。

そうは言つても、私が自分のすぐそばにいるものの友だちになれたわけではない。私は今の住居すまいに移つてから、三年も子供の大きくなるのを待った。そのころは太郎もまだ中学へ通い、婆やも家に奉公していた。釣りだ遠足だと言つて日曜ごとに次郎もじつとしていなくなつた時代だ。いったい、次郎はおもしろい子供で、一人ひとりで家の内をにぎやかしていた。夕飯後の茶の間に家のものが集まつて、電燈の下で話し込む時が来ると、弟や妹の聞きたがる

怪談などを始めて、夜のふけるのも知らずに、皆をこわがらせたり楽しませたりするのも次郎だ。そのかわり、いたずらもはげしい。私がよく次郎をしかつたのは、この子をたしなめようと思つたばかりでなく、一つには婆やと子供らの間を調節したいと思つたからで。太郎びいきの婆やは、何かにつけて「太郎さん、太郎さん」で、それが次郎をいらいらさせた。

この次郎がいつになく顔色を変えて、私のところへやって来たことがある。

「わがままだ、わがままだって、どこが、わがままだ。」

見ると次郎は顔色も青ざめ、少年らしい怒りに震えている。何がそんなにこの子を憤らせたのか、よく思い出せない。しかし、

私も黙つてはいられなかつたから、

「お前のあばれ者は研究所でも評判だというじゃないか。」

「だれが言つた——」

やよいちよう

「弥生町の奥さんがいらした時に、なんでもそんな話だつたぜ。」

「知りもしないくせに——」

次郎が私に向かつて、こんなふう**に強く出た**ことは、あとにも先にもない。急に私は自分を反省する気にもなつたし、言葉の上の争いになつてもつまらないと思つて、それぎり口をつぐんでしまった。

次郎がぷいと表へ出て行つたあとで、太郎は二階の梯子段はしごだんを

降りて来た。その時、私は太郎をつかまえて、

「お前はあんまりおとなし過ぎるんだ。お前が一番のにいさんじやないか。次郎ちゃんに言つて聞かせるのも、お前の役じやないか。」

太郎はこの側杖そばづえをくうと、持ち前のように口をとがらしたぎり、物も言わないで引き下がってしまった。そういう場合に、私のところへ来て太郎を弁護するのは、いつでも婆やだった。

しかし、私は子供をしかつて置いては、いつでもあとで悔いた。自分ながら、自分の声とも思えないような声の出るにあきれた。私はひとりでくちびるをかんで、仕事もろくろく手につかない。片親の悲しさには、私は子供をしかる父であるばかりでなく、そ

こへ提さげに出る母をも兼ねなければならなかつた。ちようど三時の菓子でも出す時が来ると、一人ひとりで二役を兼ねる俳優のように、私は母のほうに早がわりして、茶の間の火鉢ひばちのそばへ盆を並べた。次郎の好きな水菓子などを載せて出した。

「さあ、次郎ちゃんもおあがり。」

すると、次郎はしぶしぶそれを食つて、やがてきげんを直すのであつた。

私の四人の子供の中で、三郎は太郎と三つちがい、次郎とは一つちがいの兄きょうだい弟にあたる。三郎は次郎のあばれ屋ともちがい、また別の意味で、よく私のほうへ突きかかつて来た。何をこしらえて食わせ、何を買つて来てあてがつても、この子はまだ物足り

ないような顔ばかりを見せた。私の姉の家のほうから帰って来たこの子は、容易に胸を開こうとしなかつたのである。上に二人も兄があつて絶えず頭を押えられることも、三郎を不平にしたらしい。それに、次郎びいきのお徳が婆やにかわつて私の家へ奉公に来るようになってからは、今度は三郎が納まらなかつた。ちようど婆やの太郎びいきで、とかく次郎が納まらなかつたように。

「三ちゃん、人をつねつちやいやですよ。ひどいことをするのねえ、この人は。」

「なんだ。なんにもしやしないじやないか。ちよつときわつたばかりじやないか——」

お徳と三郎の間には、こんな小ぜり合いが絶えなかつた。

「とうさんはお前たちを悪くするつもりでいるんじゃないよ。お前たちをよくするつもりで育てているんだよ。かあさんでも生きててごらん、どうしても言うことをきかないような子供は、よっぱどひどい目にあうんだぜ——あのかあさんは気が短かかったからね。」

それを私は子供らに言い聞かせた。あまり三郎が他人行儀なのを見ると、時には私は思い切り打ち懲らそうと考えたこともあった。ところが、ちいさな時分から自分のそばに置いた太郎や次郎を打ち懲らすことはできても、十年他に預けて置いた三郎に手を下すことは、どうしてもできなかつた。ある日、私は自分の忿りいを制えおさきれないことがあって、今の住居すまいの玄関のところで、思わ

ずそこへやって来た三郎を打った。不思議にも、その日から三郎はかえって私になじむようになって来た。その時も私は自分の手荒な仕打ちをあとで悔いはしたが。

「十年他^{よそ}へ行っていたものは、とうさんの家へ帰って来るまでに、どうしたってまた十年はかかる。」

私はそれを家のものに言ってみせて、よく嘆息した。

私たちが住み慣れた家の二階は東北が廊下になっている。窓が二つある。その一つからは、小高い石垣^{いしがき}と板塀^{いたべい}とを境に、北隣の家の茶の間の白い小障子まで見える。三郎はよくその窓へ行った。遠い郷里のほうの木曾川^{きそがわ}の音や少年時代の友だちのことなどを思い出し顔に、その窓のところでしきりに鶯^{うぐいす}のなき声のまね

を試みた。

「うまいもんだなあ。とても鶯うぐいすの名人だ。」

三郎は階下の台所に来て、そこに働いているお徳にまで自慢して聞かせた。

ある日、この三郎が私のところへ来て言った。

「とうさん、僕の鶯うぐいすをきいた？　僕がホウ、ホケキヨとやると、

隣の家のほうでもホウ、ホケキヨとやる。僕は隣の家に鶯が飼つてあるのかと思つた。それほど僕もうまくなつたかなあと思つた。ところがねえ、本物の鶯が僕に調子を合わせていると思つたのは、大間違いサ。それが隣の家に泊まっている大学生サ。」

何かしら常に不満で、常にひとりぼっちで、自分のことしか考

えないような顔つきをしている三郎が、そんな驚うぐいすのまねなどを思いついて、寂しい少年の日をわずかに慰めているのか。そう思うと、私はこの子供を笑えなかった。

「かあさんさえ達たっしや者でいたら、こんな思いを子供にさせなくとも済んだのだ。もつと子供も自然に育つのだ。」

と、私も考えずにはいられなかった。

私が地下室にたとえてみた自分の部屋へやの障子へは、町の響きが遠く伝わって来た。私はそれを植木坂の上のほうにも、浅い谷一つ隔てた狸まみあな穴の坂のほうにも聞きつけた。私たちの住む家は西側の堀へいを境に、ある邸やしきつづきの抜け道に接していて、小高い石いしが垣きの上を通る人の足音や、いろいろな物売りの声がそこにも起

こつた。どこの石垣のすみで鳴くとも知れないような、ほそぼそとした地虫じむしの声も耳にはいる。私は庭に向いた四畳半の縁先はぎみへ鋏はさみを持ち出して、よく延びやすい自分の爪つめを切つた。

どうかすると、私は子供と一緒に遊ぼうような心も失つてしまひ、自分の狭い四畳半に隠れ、庭の草木を友として、わずかにひとりひとりを慰めようとした。子供は到底母親だけのものか、父としてしての自分は偶然に子供の内を通り過ぎる旅人に過ぎないのか――そんな嘆息が、時には自分を憂鬱ゆううつにした。そのたびに気を取り直して、また私は子供を護まもろうとする心に帰つて行つた。

安い思いもなしに、移り行く世相をながめながら、ひとりでじ

つと子供を養つて来た心地こころちはなかつた。しかし子供はそんな私に頓とんじやく着やくしていなかつたように見える。

七年も見ているうちには、みんなの変わつて行くにも驚く。震災の来る前の年あたりには太郎はすでに私のそばにいなかった。この子は十八の歳としに中学を辞して、私の郷里の山地のほうで農業の見習いを始めていた。これは私の勧めによることだが、太郎もすっかりその気になつて、長いしたくに取りかかった。ラケットを鍬くわに代えてからの太郎は、学校時代よりもずっと元気づいて来て、翌年あたりにはもう七貫目ほどの桑を背負せおいうるような若者であつた。

次郎と三郎も変わつて来た。私が五十日あまりの病床から身を

起こして、発病以来初めての風呂ふろを浴びに、鼠坂ねずみざかから森元もりもと
 町ちようの湯屋まで静かに歩いた時、兄きようだい弟ふたり二人とも心配して私の
 からだを洗いについて来たくらいだ。私の顔色はまだ悪かった。
 私は小田原おだわらの海岸まで保養を思い立ったこともある。その時も次
 郎は先に立って、弟と一緒に、小田原の停車場まで私を送りに来
 た。

やがて大地震だ。私たちは引き続き大きな異変の渦うずの中にいた。
 私が自分のそばにいる兄きようだい妹い三人の子供の性質をしみじみ考え
 るようになったのも、早川賢はやかわけんというような思いがけない人の名
 を三郎の口から聞きつけるようになったのも、そのころからだ。

毎日のような三郎の「早川賢、早川賢」は家のものを悩ました。

きのは何十人の負傷者がこの坂の上をかつがれて通つたとか、きようは焼け跡へ焼け跡へと歩いて行く人たちが舞い上がる土ぼこりの中に続いたとか、そういう混雑がやや沈まって行つたところに、幾万もの男や女の墓地のような焼け跡から、三つの疑問の死骸ががいが暗い井戸の中に見いだされたという驚くべきうわさが伝わつた。

「あゝ——早川賢もついに死んでしまつたか。」

この三郎の感傷的な調子には受け売りらしいところもないではなかつたが、まだ子供だ子供だとばかり思つていたものがもはやこんなことを言うようになったかと考えて、むしろ私にはこの子の早熟が気にかかつた。

震災以来、しばらく休みの姿であつた洋画の研究所へも、またポツポツ研究生の集まつて行くころであつた。そこから三郎が目を光らせて帰つて来るたびにいつでも同じ人のうわきをした。

「僕らの研究所にはおもしろい人がいるよ。『早川賢だけは、生かして置きたかつたねえ』——だとサ。」

無邪気な三郎の顔をながめていると、私はそう思った。どれほどの冷たい風が毎日この子の通う研究所あたりまでも吹き回している事かと。私はまた、そう思った。あの米騒動以来、だれしもの心を揺り動かさずには置かないような時代の焦しょうそう躁そうが、右も左もまだほんとうにはよくわからない三郎のような少年のところまでもやつて来たかと。私は屋外そとからいろいろなことを聞いて来

る三郎を見るたびに、ちようど強い雨にでもぬれながら帰つて来る自分の子供を見る気がした。

私たちの家では、坂の下の往来への登り口にあたる石段のそばの堀へいのところ、大きな郵便箱を出してある。毎朝の新聞はそれで配達を受けることにしてある。取り出して来て見ると、一日として何か起こっていない日はなかった。あの早川賢が横死おうしを遂げた際に、同じ運命を共にさせられたという不幸な少年一太のことなぞも、さかんに書き立ててあつた。またかと思うような号外売りがこの町の界隈かいわいへも鈴を振り立てながら走つてやつて来て、大げさな声で、そこいらに不安をまきちらして行くだけでも、私たちの神経がとがらずにはいられなかった。私は、年もまだ若く

心も柔らかい子供らの目から、殺人、強盗、放火、男女の情死、官公吏の腐敗、その他胸もふさがるような記事で満たされた毎日の新聞を隠したかった。あいにくと、世にもまれに見る可憐な少年の写真が、ある日の紙面の一隅いちぐうに大きく掲げてあつた。評判の一大だ。美しい少年の生前の面影おもかげはまた、いつそうその死をあわれに見せていた。

末子やお徳は茶の間に集まって、その日の新聞をひろげていた。そこへ三郎が研究所から帰って来た。

「あ——一太。」

三郎はすぐにそれへ目をつけた。読みさしの新聞を妹やお徳の前に投げ出すようにして言った。

「こんな、罪もない子供までも殺す必要がどこにあるだろう——」
その時の三郎の調子には、子供とも思えないような力があつた。
しかし、これほどの熱狂もいつのまにか三郎の内を通り過ぎて
行つた。伸び行くさかりの子供は、一つところにとどまろうとし
ていなかった。どんだんきのうのことを捨てて行つた。

「オヤ——三ちゃん、『早川賢』もどうしたろう。」

と、ふと私が気づいたころは、あれほど一時大騒ぎした人の名
も忘れられて、それが「木下繁きのしたげる、木下繁」に変わっていた。木
下繁もはや故人だが、一時は研究所あたりに集まる青年美術家
の憧憬どうけいの的まととなつた画家で、みんなから早い病死を惜しまれた
人だ。

その時になって見ると、新しいものを求めて熱狂するような三郎の氣質が、なんとなく私の胸にまとまって浮かんで来た。どうしてこの子がこんなに大騒ぎをやるかというに——早川賢にしても、木下繁にしても——彼らがみんな新しい人であるからであった。

「とうさんは知らないんだ——僕らの時代のことはとうさんにはわからないんだ。」

訴えるようなこの子の目は、何よりも雄弁にそれを語った。私もまんざら、こうした子供の気持ちかわからないでもない。よりすぐれたものとなるためには、自分から子供を叛そむかせたい——それくらいのこととは考えない私でもない。それにしても、少年ら

しい不満でさんざん子供から苦しめられた私は、今度はまた新しいもので責められるようになるのかと思つた。

末子も目に見えてちがつて来た、^{かたぶと}堅肥りのした体格から顔つきまで、この娘はだんだんみんなの母親に似て来た。上は男の子供ばかりの殺風景な私の家にあつては、この娘が茶の間の壁のところさぼに小乾す着物の類も目につくようになった。それほど私の家には女らしいものも少なかった。

今の住居すまいの庭は狭くて、私が猫ねこの額ひたいにたとえるほどしかないが、それでも薔薇ばらや山茶花さざんかは毎年のように花が絶えない。花の好きな末子は茶の間から庭へ降りて、わずかばかりの植木を見に行くことにも学校通いの余暇を慰めた。今の住居すまいの裏側にあたる二階の

窓のところへは、巢をかけに来る蜂はちがあつて、それが一昨年おとしも来、去年も来、何か私の家にはよい事でもある前兆のように隣近所の人たちから騒がれたこともある。末子はその窓の見える抜け道を通つては毎日学校のほうから歸つて来た。そして、好きな裁縫や編み物のような、静かな手芸に飽きることを知らないような娘であつた。そろそろ女の洋服がはやつて来て、女学校通いの娘たちが靴くつだ帽子だと新規な風俗をめずらしがるころには、末子も紺地の上着うわぎに襟えりのところだけ紫の刺繡ぬいのしてある質素な服をつくつた。その短い上着のまま、早い桃の実の色した素足すあしを脛すねのあたりまであらわしながら、茶の間を歩き回るなぞも、今までの私の家には見られなかつた凶だ。

この娘がぱったり洋服を着なくなつた。私も多少本場を見て来たその自分の経験から、「洋服のことならとうさんに相談するがいいぜ」なぞと末子に話したり、帯で形をつけることは東西の風俗ともに変わりがないと言ひ聞かせたりして、初めて着せて見る娘の洋服には母親のような注意を払つた。十番で用の足りないものは、銀座ぎんざまで買ひにお徳を娘につけてやつた。それほどにして造りあげた帽子も、服も、付属品ふたつきいっさいも、わずか二月ほどの役にしか立たないを知つた時に私も驚いた。

「串じょうだん談じゃないぜ。あの上着は十八円もかかつてるよ。そんなら初めから洋服なぞを造らなければいいんだ。」

日ごろ父一人ひとりをたよりにしている娘も、その時ばかりは私の言

うことを聞き入れようとしなかった。お徳がそこへ来て、

「どうしても末子さんは着たくないんだそうですよ。洋服はもう
いらぬから、ほしい人があつたらだれかにあげてくださいっても
いいなんて……」

こういう場合に、末子の代弁をつとめるのは、いつでもこの下
女だった。それにしても、どうかして私はせつかく新調したもの
を役に立てさせたいと思つて、

「洋服を着るんなら、とうさんがまた築地つぎじ小劇場をおごる。」

と言つてみせた。すると、お徳がまた娘の代わりに立つて来て、
「築地へは行きたいし、どうしても洋服は着たくないし……」

それが娘の心持ちだった。その時、お徳はこんなこともつけた

して言った。

「よくよく末子さんも、あの洋服がいやになつたと見えますよ。もしかしたら、屑屋くずやに売ってくれてもいいなんて……」これほどの移りやすさが年とし若わかな娘の内に潜んでいようとは、私も思いがけなかつた。でも、私も子に甘い証拠には、何かの理由さえあれば、それで娘のわがままを許したいと思つたのである。お徳に言わせると、末子の同級生で新調の校服を着て学校通いをするような娘は今は一人もないとのことだつた。

「そんなに、みんな迷っているのかなあ。」

「なんでも『赤襟あかえりのねえさん』なんて、次郎ちゃんたちがからかつたものですから、あれから末子さんも着なくなつたようです

よ。」

「まあ、あの洋服はしまつて置くサ。また役に立つ日も来るだろう。」

とうとう私には娘のわがママを許せるほどのはつきりした理由も見当たらずじまいであった。私は末子の「洋服」を三郎の「早川賢」や「木下繁」にまで持つて行つて、娘は娘なりの新しいものに迷い苦しんでいるのかと想つてみた。時には私は用達ようたしのついでに、坂の上の電車路みちを六本木ろっぽんぎまで歩いてみた。婦人の断髪はやや下火でも、洋装はまだこれからというところで、思い思いに流行の風俗を競おうとするような女学校通いの娘たちが右からも左からもあの電車の交差点こうさてんに群がり集まつていた。

私たち親子のものが今の住居すまいを見捨てようとしたころには、こんな新しいものも遠い「きのう」のことのようになっていた。三郎などは、「木下繁」ですらもはや問題でないという顔つきで、フランス最近の画界を代表する人たち——ことに、ピカソやゴッホを口にするような若者になっていた。

「とうさん、今度来たビツシエールの画えはずいぶん変わっているよ。あの人は、どんどん変わって行く——確かに、頭がいいんだらうね。」

この子の「頭がいいんだらうね」には私も吹き出してしまった。私の話相手——三人の子供はそれぞれに動き変わりつつあった。三人の中でも兄にいさん顔の次郎などは、五分刈ごぶがりであった髪を長め

に延ばして、紺こんがすり飛白つっそでの筒袖たもとを袂たもとに改めた——それもすこしきまりの悪そうに。顔だけはまだ子供のようなああの末子までが、いつのまにか本裁ほんだちの着物を着て、女らしい長い裾すそをはしよりながら、茶の間を歩き回るほどに成人した。

「子供でも大きくなったら。」

長いこと待ちに待ったその日が、ようやく私のところへやって来るようになった。しかしその日が来るころには、私はもう動けないような人になってしまふかと思うほど、そんなに長くすわり続けた自分を子供らのそばに見いだした。

「強い嵐あらしが来たものだ。」

と、私は考えた。

「とうさん——家はありそうで、なかなかないよ。僕と三ちゃん
とで毎日のように歩いて見た。二人ふたりですっかりさがして見た。こ
の麻布あざぶから青山へんへかけて、もう僕らの歩かないところはない
……」

と、次郎が言うころは、私たちの借家さがしもひと休みの時だ
った。なるべく末子の学校へ遠くないところに、そんな注文があ
った上に、よさそうな貸し家も容易に見当たらなかつたのである。
あれからまた一軒あるにはあつて、借り手のつかないうちにと大
急ぎで見に行つて来た家は、すでに約束ができていた。今の住居すまい
の南隣に三年ばかりも住んだ家族が、私たちよりも先に郊外のほ

うへ引つ越して行つてしまつてからは、いつそう周囲もひつそりとして、私たちの庭へ来る春もおそかつた。

めずらしく心持ちのよい日が私には続くようになった。私は庭に向いた部屋へやの障子をあけて、とかく気になる自分の爪つめを切つていた。そこへ次郎が来て、

「とうさんはどこへも出かけないんだねえ。」

と、さも心配するように、それを顔にあらわして言つた。

「どうしてとうさんの爪はこう延びるんだろう。こないだ切つたばかりなのに、もうこんな延びちやつた。」

と、私は次郎に言つてみせた。貝爪かいづめというやつで、切つても、切つても、延びてしかたがない。こんなことはずっと以前には私

も気づかなかつたことだ。

「とうさんも弱くなつたなあ。」

と言わぬばかりに、次郎はややしばらくそこにしゃがんで、私のすることを見ていた。ちようど三郎も作画に疲れたような顔をして、油絵の筆でも洗いに二階の梯子段はしごだんを降りて来た。

「御覧、お前たちがみんなでかじるもんだから、とうさんの脛すねはこんなに細くなつちやつた。」

私は二人の子供の前へ自分の足を投げ出して見せた。病氣以来肉も落ち瘦やせ、ずっと以前には信州の山の上から上州じようしゆう下仁田しもにたまで日に二十里の道を歩いたこともある脛すねとは自分ながら思われなかつた。

「脛すねかじりと来たよ。」

次郎は弟のほうを見て笑った。

「太郎さんを入れると、四人もいてかじるんだから、たまらないや。」

と、三郎も半分他人の事のように言つて笑った。そこへ茶の間の唐紙からかみのあいたところから、ちよいと笑顔えがおを見せたのは末子だ。脛かじりは、ここにも一人ひとりいると言うかのように。

その時まで、三郎は何かもじもじして、言いたいことも言わずにいるというふうであつたが、

「とうさん——ホワイトを一本と、テラ・ロオザを一本買つてくれない？ 絵の具が足りなくなつた。」

こう切り出した。

「こないだ買ったばかりじゃないか。」

「だって、足りないものは足りないんだもの。絵の具がなけりや、何も描^かけやしない。」

と、三郎は不平顔である。すると、次郎はさつそく弟の言葉をつかまえて、

「あ——またかじるよ。」

この次郎の串^{じょうだん}談が、みんなを吹き出させた。

私は子供らに出して見せた足をしまつて、何げなく自分の手のひらをながめた。いつでも自分の手のひらを見てみると、自分の顔を見るような気のするのが私の癖だ。いまましいことばかり

が胸に浮かんで来た。私はこの四畳半の天井からたくさんな蛆うじの落ちたことを思い出した。それが私の机のそばへも落ち、畳の上へも落ち、掃いても掃いても落ちて来る音のしたことを思い出した。何が腐り爛ただれたかと薄気味悪くなつて、二階の部屋へやから床ゆかい板いたを引きへがして見ると、鼠ねずみの死骸しがいが二つまでそこから出て来て、その一つは小さな動物の骸骨でも見るように白く曝さられていたことを思い出した。私は恐ろしくなつた。何かこう自分のことを形にあらわして見せつけるようなものが、しかもそれまで知らずにいた自分のすぐ頭の上にあつたことを思い出した。

その時になつて見ると、過ぐる七年を私は嵐あらしの中にすわりつづけて来たような気もする。私のからだにあるもので、何一つその

痕跡をとどめないものはない。髪はめつきり白くなり、すわり
胼胝は豆のように堅く、腰は腐つてしまひそうに重かつた。朝寝
の枕もとに煙草盆を引きよせて、寝そべりながら一服やるよう
な癖もついた。私の姉がそれをやった時分に、私はまだ若くて、
年取つた人たちの世界というものをのぞいて見たように思ったこ
とを覚えているが、ちようど今の私がそれと同じ姿勢で。

私はもう一度、自分の手を裏返しにして、鏡でも見るようにつ
くづくと見た。

「自分の手のひらはまだ紅い。」
と、ひとり思い直した。

午後のいい時を見て、私たちは茶の間の外にある縁側に集まつ

た。そこには私の意匠した縁台が、縁側と同じ高さに、三尺ばかりも庭のほうへ造り足してあつて、蘭らん、山査子さんざしなどの植木鉢ぼちを片すみのほうに置けるだけのゆとりはある。石垣いしがきに近い縁側の突き当たりは、壁によせて末子の小さい風琴オルガンも置いてあるところ、その上には時々とつゝの用事なぞを書きつける黒板も掛けてある。そこは私たちが古い籐椅子とういすを置き、簡単な腰掛け椅子を置いて、互いに話を持ち寄つたり、庭をながめたりして来た場所だ。毎年夏の夕方には、私たちが茶の間のチャブ台を持ち出して、よく簡単な食事しじに集まつたのもそこだ。

庭にあるおそ咲きの乙女椿おとめつばきの蕾つぼみもようやくふくらんで来た。それが目につくようになって来た。三郎は縁台のはなに立って、

庭の植木をながめながら、

「次郎ちゃん、ここの植木はどうなるんだい。」

この弟の言葉を聞くと、それまで妹と一緒に黒板の前に立って何かいたずら書きをしていた次郎が、白墨をそこに置いて三郎のいるほうへ行つた。

「そりや、引つこ抜いて持つて行つたつて、かまうもんか——もとからここの庭にあつた植木でさえなければ。」

「八つ手も大きくなりやがつたなあ。」

「あれだつて、とうさんが植えたんだよ。」

「知つてるよ。山茶花さざんかだつて、薔薇ばらだつて、そうだろう。あの乙お女とめ椿つばきだつて、そうだろう。」

気の早い子供らは、八つ手や山茶花を車に積んで今にも引つ越して行くような調子に話し合つた。

「そんなにお前たちは無造作に考えているのか。」と、私はそこにある籐椅子とういすを引きよせて、話の仲間にはいつた。「とうさんぐらいの年齢としになつてごらん、家というものはそうむやみに動かせるものでもないに。」

「どこかにいい家はないかなあ。」

と言ひ出すのは三郎だ。すると次郎は私と三郎の間に腰掛けて、「そう、そう、あの青山の墓地の裏手のところが、まだすこし残つてる。この次ぎにはあそこを歩いて見るんだナ。」

「なにしろ、日あたりがよくて、部屋へやの都合がよくて、庭もあつ

て、それで安い家と来るんだから、むずかしいや。」と、三郎は混ぜ返すように笑い出した。

「もつと大きい家ならある。」と次郎も私に言ってみせた。「五間か六間というちようどいいところがない。これはと思うような家があつても、そういうところはみんな人が住んでいてネ。」

「とうさん、五間で四十円なんて、こんな安い家をさがそうたつて無理だよ。」

「そりや、ここの家は例外サ。」と、私は言った。「まあ、ゆつくりさがすんだナ。」

「なにも追い立てをくつてるわけじゃないんだから——ここにいたって、いられないことはないんだから。」

こう次郎も兄にいさんらしいところを見せた。

やがて自分らの移って行く日が来るとしたら、どんな知らない人たちがこの家に移り住むことか。そんなことがしきりに思われた。庭にある山茶花さざんかでも、つつじでも、なんと私が植え替えて手入れをしたものかしのれない。暇さえあればほうき箒を手にして、自分の友だちのようにそれらの木を見に行ったり、落ち葉を掃いたりした。過ぐる七年の間のこと、その土にもこの石にもいろいろな痕跡こんせきを残していた。

いつのまにか末子は黒板の前を離れて、霜どけのしている庭へ降りて行った。

「次郎ちゃん、芍薬しゃくやくの芽が延びてよ。」

末子は庭にいながら呼んだ。

「蔦つたの芽も出て来たわ。」

と、また石垣いしがきの近くで末子の呼ぶ声も起こった。

遠い山地のほうにできかけている新しい家が、別にこの私たちに
見えて来た。こんな落ちつかない気持ちで今の住居すまいに暮らして
いるうちにも、そのうわさが私たちの間に出ない日はなかった。

私は郷里のほうに売り物に出た一軒の農家を太郎のために買い取
ったからである。それを峠の上から村の中央にある私たちの旧家
の跡に移し、前の年あたりから大工を入れ、新しい工事を始めさ
せていた。太郎もすでに四年の耕作の見習いを終わり、雇い入れ

ひとりひとりの婆ばあやを相手にまだ工事中の新しい家のほうに移ったと知らせて来た。彼もどうやら若い農夫として立つて行けそうに見えるて来た。

いったい、私が太郎を田舎いなかに送ったのは、もつとあの子を強くしたいと考えたからで。土に親しむようになってからの太郎は、だんだん自分の思うような人になって行った。それでも私は遠く離れている子の上を案じ暮らして、自分が病氣している間にも一日もあの山地のほうに働いている太郎のことを忘れなかった。郷里のほうから来るたよりはどれほどこの私を励ましたろう。私はまた次郎や三郎や末子と共に、どれほどそれを読むのを楽しみにしたろう。そういう私はいまだに都会の借家ずまいで、四畳半の

書齋でも事は足りると思ひながら、自分の子のために永住の家を建てようとする事は、われながら矛盾した行為だと考えたこともある。けれども、これから新規に百姓生活にはいつて行こうとする子には、寝る場所、物食う炉ばた、土を耕す農具の類からして求めてあてがわねばならなかつた。

私の四畳半に置く机の抽斗ひきだしの中には、太郎から来た手紙やはがきがしまつてある。その中には、もう麦を蒔まいたとしたのもある。工事中の家に移つて障子を張り唐紙からかみを入れてみたら、まるで別の家のように見えて来たとしたのもある。これが自分の家かと思つと、なんだか恐ろしいようないやうな気がして来たとしたのもある。だれに気兼ねもなく、新しい木の香のする炉

ばたにあぐらをかいて、飯をやっているとところだとしたのもある。

ふとしたことから、私は手にしたある雑誌の中に、この遠く離れている子の心を見つけた。それには父を思う心が寄せてあつて、いろいろなことがこまごまと書きつけてあつた。四人の兄きょうだい妹の中での長男として、自分はいちばん長く父のそばにいて見たから、それだけ親しみを感ずる心も深いとしたところがあり、それからまた、父の勸農によつて自分もその気になり、今では鋤くわを手にして田園の自然を楽しむ身であるが、四年の月日もむなしく過ぎて行つた、これからの自分は新しい家にて新しい生活を始めるべからぬ、時には自分は土を相手に戦いながら父のことを思つて涙ぐむことがあるとしたところもあり、その中にはまた、父

もこの家を見ることを楽しみにして郷里の土を踏むような日もやがて来るだろう、寺の鐘は父の健康を祈るかのよう、山に沈む夕日は何かの深い暗示を自分に投げ与えるように消えて行くとしてあつたのを覚えている。

最近に、また私は太郎からののがきを受け取っていた。それによつて私はあの山地のほうにできかけている農家の工事が風呂場ふろばを造るほどはかどつたことを知つた。なんとなく鑿のみや槌つちの音の聞こえて来るような気もした。こんなに私にも気分のいい日が続いて行くようであつたら、おりを見て、あの新しい家を見に行きたいと思う心が動いた。

長いこと私は友だちも訪ねない。日がな一日寂寞せきばくに閉ざされる思いをして部屋へやの黄色い壁も慰みの一つにながめ暮らすようなことは、私に取つてきょうに始まつたことでもない。母親のない幼い子供らをひかえるようになってから、三年もたつうちに、私はすでに同じ思いに行き詰まつてしまった。しかし、そのころの私はまだ四十二の男の厄年やくどしを迎えたばかりだった。重い病も、老年の孤独というものも知らなかった。このまますわつてしまうのかと思うような、そんな恐ろしさはもとより知らなかった。「みんな、そうですよ。子供が大きくなる時分には、わがからだ
がきかなくなりますよ。」と、私に言つてみせたある婆ばあさんもある。あんな言葉を思い出して見るのも堪たえがたかった。

「とうさん、どこへ行くの。」

ちよつと私が屋外そとへ出るにも、そう言つて声を掛けるのが次郎の癖だ。植木坂の下あたりには、きまりでそのへんの門のわきに立ち話する次郎の旧い遊び友ふるだちを見いだす。ある若者は青山師範へ。ある若者は海軍兵学校へ。七年の月日は私の子供を変えたばかりでなく、子供の友だちをも変えた。

居住者として町をながめるのもその春かぎりだろうか、そんな心持ちで私は鼠ねずみ坂かのほうへと歩いた。毎年のように椿つばきの花をつける静かな坂道がそこにある。そこにはもう春がやつて来ているようにも見える。

私の足はあまり遠くへ向かわなかつた。病氣以来、ことにそう

なつた。何か特別の用事でもないかぎり、私は樹木の多いこの町のかいわい界隈を歩き回るだけに満足した。そして、散歩の途中でも家のことが気にかかつて来るのが私の癖のようになってしまった。

「とうさん、僕たちが留守居するよ。」と、次郎なぞが言ってくる日を迎えても、ただただ私の足は家の周囲を回りに回った。あらゆる嵐あらしから自分の子供をまも護ろうとした七年前と同じように。

「旦那だんなさん。もうお帰りですか。」

と言つて、下女のお徳がこの私を玄関のところこゝろに迎えた。お徳の白い割烹着かつぽうぎも、見慣れるうちにそうおかしくなくなった。

「次郎ちゃんは？」

「お二階で御勉強でしょう。」

それを聞いてから、私は両手に持てるだけ持っていた袋包みをどつかとお徳の前に置いた。

「きようはみんなの三時にとり思つて、林檎りんごを買つて来た。ついでに菓子も買つて来た。」

「旦那さんのように、いろいろなものを買つて提さげていらつしやるかたもない。」

「そう言えば、鼠ねずみ坂ざかの椿つばきが咲いていたよ。今にもうおれの家
の庭へも春がやつて来るよ。」

そんな話をして置いて、私は自分の部屋へやへ行つた。

私の心はなんとなく静かでなかつた。実は私は次郎の将来を考えたあげく、太郎に勧めたとは別の意味で郷里に帰ることを次郎

にも勧めたいと思いついたからで。長いこと養つて来た小鳥の巢から順に一羽ずつ放してやってもいいような、そういう日がすでに來ているようにも思えた。しかし私も、それを言い出してみるまでは落ちつかなかった。

ちようど、三郎は研究所へ、末子は学校へ、二人とも出かけて行つてまだ歸らなかつた時だった。次郎はもはや毎日の研究所通いでもあるまいというふうで、しばらく家にこもっていて描き上げた一枚の油絵を手にしながら、それを私に見せに二階から降りて來た。いつでも次郎が私のところへ習作を持って來て見せるのは弟のいない時で、三郎がまた見せに來るのは兄のいない時だった。

「どうも光っていけない。」

と言いながら、その時次郎は私の四畳半の壁のそばにたてかけた画をえ本棚ほんだなの前に置き替えて見せた。兄の描かいた妹の半身像だ。

「へえ、末ちゃんだね。」

と、私も言つて、しばらく次郎と二人してその習作に見入つていた。

「あの三ちゃんが見たら、なんと言うだろう。」

その考えが苦しく私の胸へ来た。二人の兄きょうだい弟の子供が決し

て互いの画えを見せ合わないことを私はもうちゃんとよく知つていた。二人はこんな出発点のそもそもから全く別のものを持って生まれて来た画家の卵のようにも見えた。

次郎は画作に苦しみ疲れたような顔つきで、癖のように爪つめをかみながら、

「どうも、糞くそ正直くそにばかりやってもいけないと思って来た。」

「お前のはあんまり物を見つめ過ぎるんだらう。」

「どうだろう、この手はすこし堅過ぎるかね。」

「そんなことをとうさんに相談したって困るよ。とうさんは、お前、素しろうと人とじゃないか。」

その日は私はわざと素す気げない返事をした。これが平素なら、私は子供と一緒にあって、なんとか言ってみるところだ。それほど実は私も画が好きだ。しかし私は自分の畠はたけにもない素しろうと人と評ひょうが実際に子供の励ましになるのかどうか、それにすら迷った。ともあ

れ、次郎の言うことには、たよろうとするあわれさがあつた。

次郎の作った画えを前に置いて、私は自分の内に深く突き入つた。そこにわが子を見た。なんとなく次郎の求めているような素朴そぼくさは、私自身の求めているものでもある。最後からでも歩いて行こうとしているような、ゆっくりとおそい次郎の歩みは、私自身の踏もうとしている道でもある。三郎はまた三郎で、画面の上に物の奥行きなどを無視し、明快に明快にと進んで行つていゝほうで、きのう自分の描かいたものをきようは旧ふるいとするほどの変わり方だが、あの子のように新しいものを求めて熱狂するような心もまた私自身の内に潜んでいないでもない。父の矛盾てきめんは、面めんに子こに來た。兄弟であつて、同時に競争者——それは二人ふたりの子供に取つて

避けがたいことのように見えた。なるべく思い思いの道を取らせたい。その意味から言っても、私は二人の子供を引き離したかった。

「次郎ちゃん、おもしろい話があるんだが、お前はそれを聞いてくれるか。」

そんなことから切り出して、私はそれまで言い出さずにいた田舎^{なか}行き^なの話^かを次郎の前に持ち出してみた。

「半農半画家の生活もおもしろいじゃないか。」と、私は言った。「午前は自分の画^えを^かいて、午後から太郎さんの仕事を助けたつてもいいじゃないか。田舎で教員しながら画^えを^かくなんて人もあるが、ほんとうに百姓しながらやるという画家は少ない。そのまま

で腰を据^すえてかかっつてごらん、一家を成せるかもしれない。まあ、二三年は旅だと思つて出かけて行つてみてはどうだね。」

日ごろ田舎^{いなか}の好きな次郎でもなかつたら、私もこんなことを勧めはしなかつた。

「できるだけとうさんも、お前を助けるよ。」と、また私は言つた。「そのかわり、太郎さんと二人で働くんだぜ。」

「僕もよく考えてみよう。こうして東京にぐずぐずしていたつてもしかたがない。」

と、次郎は沈思するように答えて、ややしばらく物も言わずに、私のそばを離れずにいた。

四月にはいつて、私は郷里のほうに太郎の新しい家を見に行く心じたくを始めていた。いよいよ次郎も私の勧めをいれ、都会を去ろうとする決心がついたので、この子を郷里へ送る前に、私は一足先に出かけて行って来たいと思った。留守中のことは次郎に預けて行きたいと思う心もあった。日ごろ家にばかり引きこもりがちの私が、こんな気分のいい日を迎えたことは、家のものをもろこばせた。

「ちよつと三人で、じゃんけんしてみておくれ。」

と、私は自分の部屋へやから声を掛けた。気候はまだ春の寒さを繰り返していたころなので、子供らは茶の間の火鉢ひばちの周囲に集まっていた。

「オイ、じゃんけんだとよ。」

何かよい事でも期待するように、次郎は弟や妹を催促した。火鉢の周囲には三人の笑い声が起こった。

「だれだい、負けた人は。」

「僕だ。」と答えるのは三郎だ。「じゃんけんというと、いつでも僕が貧乏くじだ。」

「さあ、負けた人は、郵便箱を見て来て。」と、私が言った。

「もう太郎さんからなんとか言つて来てもいいころだ。」

「なあんだ、郵便か。」

と、三郎は頭をかきかき、古い時計のかかった柱から鍵かぎをはずして路地ろじの石段の上まで見に出かけた。

郷里のほうからのたよりがそれほど待たれる時であつた。この旅には私は末子を連れて行こうとしていたばかりでなく、青山の親しんせき戚あによめめいが嫂あによめめいに姪めいに姪めいの子供に三人までも同行したいという相談を受けていたので、いろいろ打ち合わせをして置く必要もあつたからで。待ち受けた太郎からののがきを受け取つて見ると、四月の十五日ごろに来てくれるのがいちばん都合がいい、それより早過ぎてもおそ過ぎてもしけない、まだ壁の上うわぬ塗りもすつかりできていないし、月の末になるとまた農家はいそがしくなるからとしてあつた。

「次郎ちゃん、とうさんが行つて太郎さんともよく相談して来るよ。それまでお前は東京に待つておいで。」

「太郎さんのところからも賛成だと言つて来ている。ほんとに僕がその気なら、一緒にやりたいと言つて来ている。」

「そうサ。お前が行けば太郎さんも心強かろうからナ。」

私は次郎とこんな言葉をかわした。

久しぶりで郷里を見に行く私は、みやげ物をあつめに銀座へんを歩き回つて来るだけでも、額ひたいから汗の出る思いをした。暮れからずっと続けている薬を旅の鞆かばんに納めることも忘れてはならなかつた。私は同伴する人たちのことを思い、ようやく回復したばかりのような自分の健康のことも気づかわれて、途中下諏訪しもすわの宿屋あたりで疲れを休めて行こうと考えた。やがて、四月の十三日という日が来た。いざ旅となれば、私も遠い外国を遍歴して来たこ

とのある気軽な自分に帰った。古い鞆かばんも、古い洋服も、まだそのまま役に立った。連れて行く娘のしたくもできた。そこで出かけた。

この旅には私はいろいろな望みを掛けて行つた。長いしたくと親子の協力とからできたような新しい農家を見る事もその一つであつた。七年の月日の間に数えるほどしか離れられてなかつた今の住居すまいから離れ、あの恵那山えなの見えるような静かな田舎いなかに身を置いて、深いため息でも吐ついて来たいと思う事もその一つであつた。私のそばには、三十年ぶりで郷里を見に行くという年老いた嫂あによめもいた。姪めいが連れていたのはまだ乳離れちばなもしないほどの男の子であつたが、すぐに末子に慣れて、汽車の中で抱かれたりその膝ひざに乗

ったりした。それほど私の娘も子供好きだ。その子は時々末子のそばを離れて、母のふところをさぐりに行つた。

「叔父^{おじ}さん、ごめんなさいよ。」

と言つて、姪^{めい}は幾人もの子供を生んだことのある乳房^{ちゅうぶさ}を小さなものにふくませながら話した。そんなにこの人は気の置けない道づれだ。

「そう言えば、太郎さんの家でも、屋号をつけたよ。」と、私は姪に言つてみせた。「みんなで相談して田舎^{いなか}風に『よもぎや』とつけた。それを『蓬屋』と書いたものか、『四方木屋』と書いたものかと言うんで、いろいろな説が出たよ。」

「そりや、『蓬屋』と書くよりも、『四方木屋』と書いたほうが

おもしろいでしょう。いかにも山家やまがらしくて。」

こんな話も旅らしかった。

こうふ

甲府こうふまで乗り、富士ふじ見みまで乗って行くうちに、私たちは山の上

に残っている激しい冬を感じて来た。下諏訪しもすわの宿へ行つて日が暮

れた時は、私は連れのために真綿まわたを取り寄せて着せ、またあくる

日の旅を続けようと思うほど寒かった。——それを嫂あによめにも着せ、

姪にも着せ、末子にも着せて。

おちあいがわ

中央線の落合川おちあいがわ駅まで出迎えた太郎は、村の人たちと一緒に、

この私たちを待っていた。木曾路きそじに残った冬も三留野みどのあたりまで

で、それから西はすでに花のさかりであつた。水力電気の工事で

せき留められた木曾川の水が大きな溪たにの間に見えるようなところ

で、私はカルサン姿の太郎と一緒にすることができた。そこまで行くと次郎たちの留守居する東京のほうの空も遠かった。

「ようやく来た。」

と、私はそれを太郎にも末子にも言ってみせた。

年とつたあによめ嫂だけは山やまかご駕籠、その他のものは皆徒歩で、それから

一里ばかりある静かな山やまみち路を登った。路傍に咲く山つつじでも、

すみれ堇でも、都会育ちの末子を楽しませた。登れば登るほど青く澄ん

だ山の空気が私たちの身に感じられて来た。旧い街道の跡がふる一筋

目につくところまで進んで行くと、そこはもう私の郷里の入り口

だ。途中で私はもり森さんという人の出迎えに来てくれるのにあつた。

森さんは太郎より七八歳ほども年長な友だちで、太郎が四年の農

事見習いから新築の家の工事まで、ほとんどいつさいの世話をしてくれたのもこの人だ。

郷里に帰るものの習いで、私は村の人たちや子供たちの物見高いい目を避けたかった。今だに古いうまやし駅路のなごりを見せているよ
うな坂の上のほうからは、片側に続く家々の前に添うて、細い水
の流れが走つて来ている。勝手を知った私はある抜け道を取つて、
ちようどその村の裏側へ出た。太郎は私のすぐあとから、すこし
おくれて姪や末子もついて来た。私は太郎の耕しに行くはたけ畠がどつ
ちの方角に当たるかを尋ねることすら楽しみに思いながら歩いた。
私の行く先にあるものは幼い日の記憶をよび起こすようなものば
かりだ。暗い竹たけやぶ藪のかげの細道について、左手に小高い石垣いしがき

の下へ出ると、新しい二階建ての家のがっしりとした側面が私の目に映った。新しい壁も光って見えた。思わず私は太郎を顧みて、「太郎さん、お前の家かい。」

「これが僕の家サ。」

やがて私はその石垣いしがきを曲がって、太郎自身の筆で屋号を書いた農家風の入り口の押し戸の前に行つて立つた。

四方木屋よもぎや。

太郎には私は自身に作れるだけの田と、畑と、薪材まきざいを取りに行くために要いるだけの林と、それに家とをあてがった。自作農として出発させたい考えで、余分なものはいっさいあてがわな

針を執った。

都会の借家ずまいに慣れた目で、この太郎の家を見ると、新規に造った炉ばたからしてめずらしく、表から裏口へ通り抜けられる農家風の土間もめずらしかつた。奥もかなり広くて、青山の親戚んせきを泊めるには充分であつたが、おとなから子供まで入れて五人もの客が一時にそこへ着いた時は、いかにもまだ新世帯しんじよたいらしい思いをさせた。

「きのうまで左官屋さかんやさんがはいつていた。庭などはまだちつとも手がつけてない。」

と、太郎は私に言つてみせた。

何もかも新規だ。まだ柱時計一つかかかっていない炉ばたには、

太郎の家で雇っているお霜婆しもばあさんのほかに、近くに住むお菊婆きくさんも手伝いに来てくれ、森さんの母かあさんまで来てわが子の世話でもするようになつてくれた。

私は太郎と二人ふたりで部屋部屋へやべやを見て回るような時を見つけようとした。それが容易に見当たらなかつた。

「この家は気に入つた。思つたよりいい家だ。よつぽど森さんにはお礼を言つてもいいね。」

わずかにこんな話をしたかと思うと、また太郎はいそがしそうに私のそばから離れて行つた。そこいらには、まだかわき切らない壁へよせて、私たちの荷物が取り散らしてある。末子は姪めいの子供を連れながら部屋部屋をあちこちとめずらしそうに歩き回つて

いる。あによめ 嫂も三十年ぶりでの帰省とあつて、旧ふるなじみの人たちが出たりはいつたりするだけでも、かなりごたごたした。

人を避けて、私は眺ちようぼう望のいい二階へ上がって見た。石を載せた板屋根、ところどころに咲きみだれた花の梢こずえ、その向こうには春深く霞かすんだ美濃みのの平野が遠く見渡される。天気の良い日には近江おうみの伊吹山いぶきやままでかすかに見えるということを私は幼年こどものころに自分の父からよく聞かされたものだが、かつてその父の旧ふるい家から望んだ山々を今は自分の新しい家から望んだ。

私はその二階へ上がって来た森さんとも一緒に、しばらく窓のそばに立って、久しぶりで自分を迎えてくれるような恵え那山なにもながめ入った。あそこに深い谷がある、あそこに遠い高原がある、

とその窓から指^さして言うことができた。

「おかげで、いい家ができました。太郎さんにくれるのは惜しいような気がして来ました。これまでに世話してくださるのも、なかなか容易じゃありません。私もまた、時々本でも読みに帰ります。」

と、私は森さんに話したが、礼の心は言葉にも尽くせなかつた。翌日になつても、私は太郎と二人^{ふたり}ぎりでゆつくり話すような機会を見いださなかつた。嫂^{あによめ}の墓参に。そのお供に。入れかわり立ちかわり訪^{たず}ねて来る村の人たちの応接に。午後^{ごご}に、また私は人を避けて、炬^{たき}ばたつづきの六畳^{むつ畳}ばかりの部屋^{へや}に太郎を見つけた。

「とうさん、みやげはこれつきり？」

「なんだい、これつきりとは。」

私は約束の柱時計を太郎のところへ提^さげて来られなかった。それを太郎が催促したのだ。

「次郎ちゃんが来る時に、時計は持たしてよこす。」と言ったあとで、ようやく私は次郎のことをそこへ持ち出した。「どうだろう、次郎ちゃんは来たいと言ってるが、お前の迷惑になるようなことはなからうか。」

「そんなことはない。あのとおり二階はあいているし、次郎ちゃんの部屋はあるし、僕はもうそのつもりにして待っているところだ。」

「半日お前の手伝いをさせる、半日画^えをかかせる——そんなふう

にしてやらしてみるか。何も試みだ。」

「まあ、最初の一年ぐらひは、僕から言えばかえつて邪魔になるくらいなものだろうけれど——そのうちには次郎ちゃんも慣れるだろう。なかなか百姓もむずかしいからね。」

そういう太郎の手は、指の骨のふしぶしが強くあらわれていて、どんな荒仕事にも耐えられそうに見えた。その手はもはやいつぱしの若い百姓の手だった。この子の机のそばには、本箱なぞも置いてあつて、農民と農村に関する書籍の入れてあるのも私の目についた。

その日は私は新しい木の香のする風呂桶ふろおけに身を浸して、わずかに旅の疲れを忘れた。私は山家やまがらしい炉ばばたで婆ばあさんたちの話も

聞いてみたかった。で、その晩はあかあかとした焚火たきびのほてりが自分の顔へ来るところへ行つて、くつろいだ。

「ほんとに、おらのようなものの造るものでも、太郎さんはうまいと言つて食べさせろ。そう思うと、おらはオヤゲナイような気がする。」

と、私に言つてみせるのは、肥ふとつて丈夫そうなお霜婆さんだ。私の郷里では、このお霜婆さんの話すように、女でも「おら」だ。「どうだなし、こんない家ができたら、お前さまもうれしからず。」

と、今度はお菊婆さんが言い出した。無口なお霜婆さんに比べると、この人はよく話した。

「今度帰つて見て、私も安心しました。」と、私は言った。「私
はあの太郎さんをだんなしゅう旦那衆にするつもりはありません。要いるだけ
の道具はあてがう、あとは自分で働け——そのつもりです。」

「えゝ、太郎さんもその気だで。」と、お菊婆さんは炉の火のほ
うに気をくばりながら言った。「この焚木たきぎでもなんでも、みんな
自分で山から背負しよつておいでるぞなし。そりや、お前さま、ここ
の家を建てるだけでも、どのくらいよく働いたかしれずか。」

炉ばたでの話は尽きなかった。

みつか

あによめ

ふる

よもぎや

三日目には私は嫂あによめのために旧いなじみの人を四方木屋の二階に

集めて、森さんのお母さんかあやお菊婆さんの手料理で、みんなと一

緒に久しぶりの酒でもくみかわしたいと思つた。三年前に兄を見

送つてからの嫂あによめは、にわかふかに老けて見える人であつた。おそらくこれが嫂に取つての郷里の見納めであろうとも思われたからで。

私たちは炉ばたにいて順にそこへ集まつて来る客を待つた。嫂ふるが旧いなじみの人々で、三十年の昔を語り合おうとするような男の老人はもはやこの村にはいなかった。そういう老人という老人はほとんど死に絶えた。招かれて来るお客はお婆さんばかりで、腰かがを曲めながらはいつて来る人のあとには、すこし耳も遠くなつたという人の顔も見えた。隣村からわざわざ嫂めいや姪めいや私の娘を見にやつて来てくれた人もあつたが、私と同年ですでに幾人かの孫のあるという未亡みぼうじん人が、その日の客の中での年少者であつた。

しかし、一同が二階に集まつて見ると、このお婆さんたちの元

気のいい話し声がまた私をびつくりさせた。その中でも、一番の高齢者で、いちばん元気よく見えるのは隣家のお婆さんであった。この人は酒の盃さかずきを前に置いて、

「どうか、まあ太郎さんにもよいおよめさんを見つけてあげたいもんだ。とうさんの御心配で、こうして家もできたし。この次ぎは、およめさんだ。そのおりには私もまたきょうのように呼んでいただきたい——私は私だけのお祝いを申し上げに來たい。」

八十歳あまりになる人の顔にはまだみずみずしい光沢つやがあつた。私はこの隣家のお婆さんの孫にあたる子息むすこや、森さんなぞと一緒に同じ食卓について、日ごろはめつたにやらない酒をすこしばかりやった。太郎はまたこの新築した二階の部屋へやで初めての客

をするという顔つきで、冷めた徳利を集めたり、それを熱燗に取り替えて来たりして、二階と階下の間を往ったり来たりした。

「太郎さんも、そこへおすわり。」と、私は言った。「森さんのおかあさんが丹精してくだすったごちそうもある——下諏訪の宿屋からとうさんの提げて来た若鷺もある——」

「こういう田舎にいますと、酒をやるようになります。」と、森さんが、私に言ってみせた。「どうしても、周囲がそうだもんですから。」

「太郎さんもすこしは飲めるように、なりましたらうか。」と、私は半分串談のように。

「え、太郎さんは強い。」それが森さんの返事だった。「いく

ら飲んで、太郎さんの酔ったところを見た事がない。」

その時、私は森さんから返った盃さかずきを太郎の前に置いて、

「今から酒はすこし早過ぎるぜ。しかし、きようは特別だ。まあ、一杯やれ。」

わが子の労苦をねぎらおうとする心から、思わず私は自分で徳利を持ち添えて勧めた。若者、万歳——口にこそそれを出さなかつたが、青春を祝する私の心はその盃にあふれた。私は自分の年とつたことも忘れて、いろいろと皆を款待もてなし顔がおな太郎の酒をしばらくそこにながめていた。

七日の後には私は青山の親戚しんせきや末子と共にこの山を降りた。

落合川の駅からも来た道を汽車で帰ると、下諏訪しもすわへ行つて日が暮れた。私は太郎の作っている桑畑や麦畑を見ることもかなわなかつたほど、いそがしい日を郷里のほうで送り続けて来た。察しのすくない郷里の人たちは思うように私を休ませてくれなかつた。この帰りには、いったん下諏訪で下車して次の汽車の来るのを待ち、また夜行の旅を続けたが、あによめ 嫂でもめい 姪でも言葉すくなくに乗つて行つた。末子などは汽車の窓のところにハンケチを載せて、ただうとうとと眠りつづけて行つた。

東京の朝も見直すような心持ちで、私は娘と一緒に家に帰りつた。私も激しい疲れの出るのを覚えて、へや 部屋の畳の上にごろごろしながら寝てばかりいるような自分を留守居するもののそばに

見つけた。

「旦那だんなさん、あちらはいかがでした。」

と、お徳が熱い茶などを持って来てくれると、私は太郎が山から背負しょつて来たという木で焚たいた炉にもあたり、それで沸ふかした風呂にもはいつて来た話などをして、そこへ横になった。

「とうさん、どうだった。」

「思ったより太郎さんの家はいい家だったよ。しっかりとできていたよ。でも、ぜいたくな感じはすこしもなかった。森さんの寄付してくれた古い小屋なども裏のほうに造り足してあつたよ。」

私は次郎や三郎にもこんな話を聞かせて置いて、またそこに横になった。

ふつか 二日も三日も私は寝てばかりいた。まだ半分あの山の上に身を置くような気もしていた。旅の印象は疲れた頭に残って、容易に私から離れなかつた。私の目には明るい静かな部屋がある。新しい障子のそばには火鉢ひばちが置いてある。客が来てそこで話し込んでゐる。村の校長さんという人も見えていて「太郎さんの百姓姿をまだ御覧になりませんか、なかなかようござんすよ。」と、私に言ってみせたことを思い出した。「おもしろい話もあります。太郎さんがまだ笹刈ささがりにも慣れない時分のことです。笹刈りと言えどこの土地でも骨の折れる仕事ですからね。あの笹刈りがあるために、他よそからこの土地へおよめに来手きてがないと言われるくらい骨の折れる仕事ですからね。太郎さんもみんなと一緒に、威勢よく

その笹刈りに出かけて行つたはよかつたが、腰をさがして見ると、鎌かまを忘れた。大笑いしましたよ。それでも村の若い者がみんなで寄つて、太郎さんに刈つてあげたそうですがね。どうして、この節の太郎さんはもうそんなことはありません。」と、その校長さんの言つたことを思い出した。そう言えば、あの村の二三の家の軒先に刈り乾ほしてあつた笹ささの葉はまだ私の目にある。あれを刈りに行くものは、腰ひなわに火繩ひなわを提さげ、それを蚊か遣やりの代わりとし、襲襲い来る無数の藪蚊やぶかと戦いながら、高い崖がけの上に生はえているのを下から刈り取つて来るといふ。あれは熊くま笹ささというやつか。見たばかりでも恐ろしげに、幅広で鋭くとがったあの笹の葉は忘れ難がたい。私はまた、水に乏しいあの山の上で、遠いわが家やの先祖ののこし

た古い井戸の水が太郎の家に活いき返っていたことを思い出した。
新しい木の香のする風呂桶ふろおけに身を浸した時の楽しさを思い出した。
ほんとうに自分の子の家に帰ったような気のしたのも、そういう
時であつたことを思い出した。

しかし、こういう旅疲れも自然とぬけて行つた。そして、そこ
から私が身を起こしたころには、過ぐる七年の間続きに続いて来
たような寂しい嵐あらしの跡を見直そうとする心を起こした。こんな心
持ちは、あの太郎の家を見るまでは私に起こらなかつたことだ。

留守宅には種々な用事が私を待っていた。その中でも、さしあ
たり次郎たちと相談しなければならぬ事が二つあつた。一つは
見つかつたという借家の事だ。さつそく私は次郎と三郎のふたり二人を

連れて青山方面まで見に行つて来た。今少しで約束するところまで行つた。見合わせた。歸つて来て、そんな家を無理して借りるよりも、まだしも今の住居すまいのほうがましだということにおもひ当たつた。いったんは私の心も今の住居すまいを捨てたものである。しかし、もう一度この屋根の下に辛抱しんぼうしてみようと思う心はすでにその時に私のうちにきざして来た。

今一つは、次郎の事だ。私は太郎から聞いて来た返事を次郎に伝えて、いよいよ郷里のほうへ出発するように、そのしたくに取り掛からせることにした。

「次郎ちゃん、番町ばんちようの先生のところへも暇いとまご乞こに行つて来るがいいぜ。」

「そうだよ。」

私たちはこんな言葉をかわすようになった。「番町の先生」とは、私より年下の友だちで、日ごろ次郎のような未熟なものでも末たのもしく思つて見ていてくれる美術家である。

「今ある展覧会も、できるだけ見て行くがいいぜ。」

「そうだよ。」

と、また次郎が答えた。

五月にはいつて、次郎は半分引越した。越したような騒ぎを始めた。何かごとごとと言わせて戸棚を片づける音、とだな画架や額縁がくぶちを荷造りする音、二階の部屋を歩き回る音などが、毎日のように私の頭の上でした。私も階下の四畳半においてその音を聞きながら、七年の

古巣からこの子を送り出すまでは、心も落ちつかなかつた。仕事の上じょうず手なお徳は次郎のために、郷里のほうへ行つてから着るものなぞを縫つた。裁縫の材料、材料で次ぎから次ぎへと追われてゐる末子が学校でのけいこに縫つた太郎のあわせばかり拾羽織もそこへでき上がった。それを柳行李やなぎこうりにつめさせてなどと家のものが語り合ふのも、なんとなく若者の旅立ちの前らしかつた。

次郎の田舎行きは、よく三郎の話にも上のぼつた。三郎は研究所から歸つて来るたびに、その話を私にして、

「次郎ちゃんのこと、研究所でもみんな知ってるよ。僕の友だちが聞いて『それだけの決心がついたのは、えらい』——とサ。しかし僕は田舎へ行く気にならないなあ。」

「お前はお前、次郎ちゃんも次郎ちゃんでもいい。広い芸術の世界だもの——みんながみんな、そう同じような道を踏まなくてもいい。」

と、私は答えた。

子供の変わつて行くにも驚く。三郎も私に向かつて、以前のようには感情を隠さなくなつた。めまぐるしく動いてやまないような三郎にも、なんとなく落ちついたところが見えて来た。子供の変わるのはおとなの移り気とは違う、子供は常に新しい——そう私に思わせるのもこの三郎だ。

やがて次郎は番町の先生の家へも暇いとまご乞こいに寄つたと言つて、改まつた顔つきで帰つて来た。餞せんべつ別のしるしに贈られたという

二枚の書をも私の前に取り出して見せた。それはみごとな筆で大きく書いてあつて、あの四方木屋よもぎやの壁にでも掛けてながめ楽しむにふさわしいものだった。

「とうさん、番町の先生はそう言つたよ。いろいろな人の例を僕に引いてみせてね、田舎いなかへ引つ込んでしまふと画えがかけなくなる
とサ。」

と、次郎はやや不安らしく言つたあとで、さらに言葉を継いで、
「それから、こういうものをくれてよこした。田舎いなかへ行つたら読
んでごらんなさいと言つて僕にくれてよこした。何かと思つたら、
『扶桑陰逸伝』ふそういんいつでんサ。画えの本でもくれればいいのに、こんな仙せん
人の本サ。」

「仙人の本はよかった。」と、私も吹き出した。

「これはとうさんでも読むにちようどいい。」

「とうさんだつて、まだ仙人には早いよ。」

「しかしお餞せんべつ別べつと思えばありがたい。きようは番町でいろいろな話が出たよ。ヴィルドラツクという人の持つて来たマチスの画えの話も出たよ。きようの話はみんなよかった。それから先生の奥さんも、御飯を一緒に食べて行けと言つてしきりに勧めてくださいましたが、僕は帰つて来た。」

先輩の一言一行も忘れられないかのように、次郎はそれを私に語つてみせた。

いよいよ次郎の家を離れて行く日も近づいた。次郎はその日を

茶の間の縁先にある黒板の上に記しるしつけて見て、なんとなくざりが惜しまるといふふうであつた。やがて、荷造りまでもできなかった。この都会から田舎へ帰つて行く子を送る前の一日だけが残つた。

「どっこいしょ。」

私がそれをやるのに不思議はないが、まだ若いさかりのお徳がそれをやった。お徳も私の家に長く奉公しているうちに、そんなことが自然と口に出るほど、いつのまにか私の癖に染まつたと見える。

このお徳は茶の間と台所の間を往いつたり来たりして、次郎の「送別会」のしたくを始めた。そういうお徳自身も遠からず暇を

取つて、代わりの女中のあり次第に国もとのほうへ帰ろうとしていた。

「旦那さん、お肴屋さかなやさんがまいりました。旦那さんの分だけ何か取りましようか。次郎ちゃんたちはライス・カレエがいいそうですよ。」

「ライス・カレエの送別会か。どうしてあんなものがそう好きなんだらうなあ。」

「だって、皆さんがそうおつしやるんですもの。——三ちゃんでも、末子さんでも。」

私はお徳の前に立つて、肴屋さかなやの持つて来た付木つけぎにいそがしく目を通した。それには河岸かしから買って来た魚さかなの名が並べ記しるしてあ

る。長い月日の間、私はこんな主婦の役をも兼ねて来て、好ききらいの多い子供らのために毎日の総菜そうざいを考えることも日課の一つのようになっていた。

「待てよ。おれはどうでもいいが、送別会のおつきあいに鮎あゆの一本つひき尾ももらって置くか。」

と、私はお徳に話した。

「末ちゃん、おまいか。」

と、私はまた小さな娘にでも注意するように末子に言つて、白の前掛けをかけさせ、その日の台所を手伝わせることも忘れなかつた。

「ほんとに、太郎さんのようなおとなしい人のおよめさんになる

ものは仕合わせだ。わたしもこれでもつと年でも取つてると——
もつとお婆さんばあだと——台所の手伝いにも行つてあげるんだけ
れど。」

それが茶の間に来てのお徳の述懐だ。

茶の間には古い柱時計のほかにも、次郎が銀座まで行つて買つて
来た新しいのも壁の上に掛けてあつた。太郎への約束の柱時計だ。
今度次郎が提さげて行こうとするものだ。それが古い時計と並んで
一緒に動きはじめていた。

「すごい時計だ。」

と、見に来て言うものがある。そろそろ夕飯のしたくができる
ころには、私たちは茶の間に集まって新しい時計の形をいろいろ

に言つてみたり、それを古いほうに比べたりした。私の四人の子供がまだ生まれない前からあるのも、その古いほうの時計だ。

やがて私たちは一緒に食卓についた。次郎は三郎とむかい合い、私は末子とむかい合つた。

「送別会」とは名ばかりのような粗末な食事でも、こうして三人の兄きょうだい妹の顔がそろうのはまたいつのことかと思わせた。

「いよいよ明日あすは次郎ちゃんも出かけるかね。」と、私は古い柱時計を見ながら言つた。「かあさんが亡なくなつてから、ことしでもう十七年にもなるよ。あのおかあさんが生きていて、お前たちの話す言葉を聞いたら驚くだろうなあ。わざと乱暴な言葉を使う。『時計を買いやがった——動いていやがらあ』——お前たちのは

その調子だもの。」

「いけねえ、いけねえ。」と、次郎は頭をかきながら食った。

「とうさんがそんなことを言つたつて、みんながそうだからしかたがない。」と、三郎も笑いながら食った。

「そう言えば、次郎ちゃんも一年に二度ぐらいずつは東京へ出ておいでよ。なにも田舎いなかに引つ込みきりと考えなくてもいいよ。二年は旅だと思つてごらん。とうさんなぞも旅をするたびに自分の道が開けて来た。田舎へ行くと、友だちはすくなかろうなあ。ことに画えのほうの友だちが——それだけがとうさんの気がかりだ。」

こう私が言うと、今まで子供の友だちのようにして暮らして来

たお徳も長い奉公を思い出し顔に、

「次郎ちゃんが行つてしまうと、急にさびしくなりましようねえ。人を送るのもいいが、わたしはあとがいやです。」

と、給仕きゆうじしながら言つた。

「あゝ、食つた。食つた。」

間もなくその声が子供らの間に起こつた。三郎は口をふいて、そこにある箆筒たんすを背に足を投げ出した。次郎は床柱とこばしらのほうへ寄つて、自分で装置したラジオの受話器を耳にあてがった。細いアンテナの線を通して伝わって来る都会の声も、その音楽も、当分は耳にすることのできないかのように。

その晩は、お徳もなごりを惜しむというふうで、台所を片づけ

てから子供らの相手になった。お徳はにぎやかなことの好きな女で、戯れに子供らから腕押しでも所望されると、いやだとは言わなかった。肥^{ふと}って丈夫そうなお徳と、やせぎすで力のある次郎とは、おもしろい取り組みを見せた。さかなな笑い声が茶の間で起こるのを聞くと、私も自分の部屋^{へや}にじつとしていられなかった。

「次郎ちゃんと姉^{ねい}やとは互角^{ごかく}だ。」

そんなことを言つて見ている三郎たちのそばで、また二人^{ふたり}は勝負を争つた。健康そのものとも言いたいお徳が肥^{ふと}った膝^{ひざ}を乗り出して、腕に力を入れた時は、次郎もそれをどうすることもできなかった。若々しい血潮は見る見る次郎の顔^{のほ}に上つた。堅く組んだ手も震えた。私はまたハラハラしながらそれを見ていた。

「オ、痛い。御覧なさいな、私の手はこんなに紅あかくなつちやつたこと。」

と、お徳は血でもにじむかと見えるほど紅く熱した腕をさすつた。

「三ちゃんも姉ねいやとやつてごらんなさいな。」

と、末子がそばから勧めたが、三郎は応じなかつた。

「僕はよす。左ならやつてみてもいいけれど。」

そういう三郎は左を得意としていた。腕押しに、骨牌かるたに、その晩は笑い声が尽きなかつた。

翌日はもはや新しい柱時計が私たちの家の茶の間にかかつていなかった。次郎はそれを厚い紙箱に入れて、旅に提さげて行かれる

ように荷造りした。

その時になつてみると、太郎はあの山地のほうですでに田植えを始めている。次郎はこれから出かけようとしている。お徳もやがては国をさして帰ろうとしている。次郎のいないあとは、にわかにかにも寂しかろうけれど、日ごろせせこましく窮屈にのみ暮らして来た私たちの前途には、いくらかのゆとりのある日も来そうになつた。私は私で、もう一度自分の書齋を二階の四畳半に移し、この次ぎは客としての次郎をわが家やに迎えようと思うなら、それもできない相談ではないように見えて来た。どうせ今の住居すまいはあの愛宕あたご下の宿屋からの延長である。残る二人の子供に不自由さおもえなくば、そう想つてみた。五十円や六十円の家賃で、そう思わ

しい借家のないこともわかった。次郎の出発を機会に、ようやく私も今の住居すまいに居座りいすわと観念するようになった。

私はひとりで、例の地下室のような四畳半の窓へ近く行った。そこいらはもうすっかり青葉の世界だった。私は両方の拳こぶしを堅く握りしめ、それをうんと高く延ばし、大きなあくびを一つした。

「大都市は墓地です。人間はそこには生活していません。」

これは日ごろ私の胸を往いつたり来たりする、あるすぐれた芸術家の言葉だ。あの子供らのよく遊びに行った島津山しまづやまの上から、

芝麻布方面しばあびぐに連なり続く人家の屋根を望んだ時のかつての自分の心持ちをも思い合わせ、私はそういう自分自身の立つ位置さえもが——あの芸術家の言い草ではないが、いつのまにか墓地のよ

うな気のして来たことを胸に浮かべてみた。過ぐる七年のさびしい嵐は、^{あらし}それほど私の生活を行き詰まったものとした。

私が見直そうと思つて来たのも、その墓地だ。そして、その墓地から起き上がる時が、どうやら、自分のようなものにもやつて来たかのように思われた。その時になつて見ると、「父は父、子は子」でなく、「自分は自分、子供は子供ら」でもなく、ほんとうに「私たち」への道が見えはじめた。

夕日が二階の部屋へやに満ちて来た。階下にある四畳半や茶の間はもう薄暗い。次郎の出発にはまだ間があつたが、まとめた荷物は二階から玄関のところへ運んであつた。

「さあ、これだ、これが僕の持つて行く一番のおみやげだ。」

と、次郎は言つて、すっかり荷ごしらえのできた時計をあちこちと持ち回つた。

「どれ、わたしにも持たせてみて。」

と、末子は兄のそばへ寄つて言つた。

遠い山地も、にわかには私たちには近くなつた。この新しい柱時計が四方木屋よもぎやの炬ばたにかかつて音のする日を想おもいみるだけでも、楽しかつた。日ごろ私が矛盾のように自分の行為を考えたことも、今はその矛盾が矛盾でないような時も来た。子のために建てたあの永住の家と、旅にも等しい自分の仮の借家にじずまいの間には、虹にじのような橋がかかつたように思われて来た。

「次郎ちゃん、停車場まで送りましょう。末子さんもわたしと一

緒にいらつしやいね。」

と、お徳が言い出した。

「僕も送つて行くよ。」

と、三郎も言った。すると、次郎は首を振つて、

「だれも来ちやいけない。今度はだれにも送つてもらわない。」

それが次郎の望みらしかった。私は末子やお徳を思いとまらせ

たが、せめ三郎だけをやって、飯田橋いいだばしの停車場まで見送らせる

ことにした。

やがて、そこいらはすっかり暗くなつた。まだ宵よいの口から、家

の周囲はひっそりとしてきて、坂の下を通る人の足音もすくない。

都会に住むとも思えないほどの静かさだ。気の早い次郎は出発の

時を待ちかねて、住み慣れた家の周囲を一回りして帰って来たくらいだ。

「行つてまいります。」

茶の間の古い時計が九時を打つところに、私たちはその声を聞いた。植木坂の上には次郎の荷物を積んだ車が先に動いて行つた。いつのまにか次郎も家の外の路地ろじを踏む靴くつの音をさせて、静かに私たちから離れて行つた。

青空文庫情報

底本：「嵐 他二編」岩波文庫、岩波書店

1956（昭和31）年3月26日第1刷発行

1969（昭和44）年9月16日第13刷改版発行

1974（昭和49）年12月20日第18刷発行

入力：紅邪鬼

校正：林幸雄

2001年1月15日公開

2005年11月20日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

嵐

島崎藤村

2020年 7月12日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>